

『ハード・タイムズ』における時間

近 藤 浩

I コークタウンの時間

チャールズ・ディケンズの『ハード・タイムズ (*Hard Times*)』(1854)は、功利主義の世の中を背景とし、架空の工業都市コークタウンを舞台とする作品である。この町の様子は次のように紹介される。

そこは機械と高い煙突の町であり、煙突からは長々とした蛇のような煙がいつまでもたなびき、その煙はとぐろを解くことがなかった。そこには…窓だらけの建物がおびただしく積み重なるように立ち並び、その内側ではがたがたという音や振動が一日中続き、蒸気エンジンのピストンが、憂鬱で気が変になった象の頭みたいに、単調に上下運動をしていた。町にはどれも似かよった大通りが数本あり、さらに似かよった細い通りが数多くあって、その細い通りには同じように似かよった人々が暮らしており、彼らは皆同じ時刻に、同じ足音を同じ舗装路に響かせて、同じ仕事をするために行き来しており、彼らにとってはどの日も昨日や明日と同じで、どの年も去年や来年とそっくりなのであった。(22)

人々が心のゆとりのない労働の日々を送っていることがよくわかる。彼らの生活リズムは狂おしいほどに単調であり、その単調さは蒸気エンジンのピストンの動きに象徴される。このピストンの描写が作品の中で何度も利用されることからわかるように、機械の規則的な動きはコークタウンに響き続けるリズムなのである。これは着実な生産を示すリズムであるから、当然、ジョサイア・バウンダビー (Josiah Bounderby) を始めとする資本主義の工場経営者たちにとっては侵すべからざるものとなる。それゆえ、「働き手 (the Hands)」(63) という非人間的な呼称を与えられる労働者たちは、月曜の朝から土曜の夜まで一日十五時間、機械的に働き続けることを求められることになり、彼らの人生における時間も単調なリズムに陥ってしまう。

この機械的リズムはまた、将来、町の政治経済の担い手になるはずの子供たちにも無関係ではない。「事実、事実、事実! … (Fact, fact, fact!...)」(7) という一音節の言葉の連続が生み出す単調なリズムに乗せて、トマス・グラッドグラインド (Thomas Gradgrind) は、彼が経営する学校の児童たちに、彼の経済理念を植えつけるのだ。この理念は「グラッドグラインドの哲学」(288) と呼ばれるものであり、ディケンズがこの言葉を作品タイトルの候補の一つに入れていたことを考慮すれば (Forster, 119-20)、注意して見ておく必要がある。この哲学は「良きサマリア人は悪しき経済学者〔である〕こと」(215) を証明するのに役立つもので、その内容は以下のように説明される。

すべてのことに代金が支払われるべきであるというのが、グラッドグラインド哲学の基本原則であった。どんなことがあっても、誰かが誰かに対して売買なしで何かを与えたり援助したりするべきではなかった。感謝の念は廃されるべきで、その念から生じる美德など存在するべきではなかった。誕生から死に至るまで、人生のどの一インチ

も、勘定台越しの契約であるべきであった。そしてもしそんなやり方で天国に行けないのならば、そこは政治経済の場所ではなく、私たちはそこに何の用もないのであった。(288)

功利主義社会に対するディケンズの痛烈な非難が読み取れる。子供たちの無垢な心に植えつけられるのは冷徹な経済理念なのだ。そこに思いやりといったような人間的な感情は含まれない。契約を交わした、だから品物なりサービスなりを供給する、供給したのだから支払いを受けるといふ、事実に基づいた論理的思考のみが必要とされる。この思考の仕方を重視するからこそ、グラッドグラインドは、教室で子供たちの教育方針について次のように述べるのである。

「ここにいる少年少女たちに事実以外のことを教えるてはならない。事実のみが人生に必要とされるのだ。他のものは何も植えつけてはならない。他のものはすべて根絶やしにするのだ。論理的に思考する動物の精神は事実に基づいてのみ形成することができるのである。他のものはこの子たちに役立つことはないであろう。」(1)

事実主義は論理的思考に寄与し、論理的思考は商取引を着々と進め経済を促進させることにつながる。それがグラッドグラインドの信念なのである。しかしながら、事実主義に基づいて教えを受ける子供たちは、無味乾燥な事実を次から次へと受け入れ、血の通わない論理的思考の訓練を重ね、着々と大人に成長していくことを要求される。そのような着実な進歩は経済理念に則したものであっても、子供たちにとっては機械的で単調な歩みにしかならないのである。

機械的リズムで単調に流れるコークタウンの時間は、時計でのみ示すことが可能な時間である。時計は時間を測定して文字盤上で何時何分か

を表示する機械に過ぎない。本来、時間は質量を持たないし、人間の気持ちしだいで進むのが遅くなったり早くなったり感じられるものである。時計はそうした時間の柔軟性を表示できない。機械の仕掛けによって人工的に刻まれる時間を示すのみである。

そのような時計を、ディケンズが好意的に考えるはずもない。グラッドグラインドの自宅について次のような表現がある。「…ストーン・ロッジでの生活は人間の干渉を妨害する一つの機械のように単調に回っていた…。」(56) 彼の部屋は「いかめしい部屋で、そこには恐ろしく統計学的な時計があり、その時計は棺桶のふたをコツコツと叩くような音を使って一秒一秒を測定していた」(96) と説明される。そしてこの時計は「…一秒一秒が生まれるたびにその頭を殴りつけ、いつもの規則正しさでもってその一秒一秒を葬っていた。」(107) この作品において、時計は、生まれてから死ぬまでに過ごされる時間が、連続性を持たない一瞬一瞬の繰り返しに過ぎないことを示す装置と位置づけられているのである。

このように考えてくると、コークタウンには随分と支配者に都合の良い時間が流れていることがわかる。ここで言う支配者とはバウンダビーのような経営者や、グラッドグラインドのような教育者・政治家のことである。労働者たちは時計の時間に従って働き、経営者に確実に利益をもたらせてくれる。彼らの人生は同じリズムで過ぎていく日々の繰り返しであり、生産は着実に進む。子供たちは日々着々と大人の経済理念を習得し、最短時間で町の経済の担い手に成長してくれる。支配者の意図した時間の流れの中に人々は埋没してしまうのである。支配者の時間は功利主義社会の時間であり、人々を縛りつけておくために人工的に生み出された時間でもある。

II 時間を支配する術

人工的な時間の流れは、当然のことながら、人為的な配慮がなければ維持することはできない。教育者にしても経営者にしても、そうした配慮をすることが必要になる。

グラッドグラインドは、自分の子供たちや学校の児童に、事実に基づいた論理的思考を強制する一方で、「空想 (Fancy)」(7) を禁じている。彼が空想を排除しようとするからには、それが人工的な時間の流れを妨げるからに違いないのである。

空想は『ハード・タイムズ』の主要概念であると言われており (Goldberg, 92)、ディケンズは作品中で適宜空想の大切さを説いている。以下の引用は、そんな箇所の一つで、グラッドグラインドの娘ルイーザ (Louisa) に関するものである。この引用はまた、幼い頃から父親によって事実と計算に基づく論理的思考を植えつけられた彼女が、いかに空想と無縁であったかも示す。

子供時代の夢——その空想の物語。優雅で、美しく、慈悲深く、とても本当にあるとは思えない彼方の世界の装飾品。そうしたものは、一度はその存在を信じられることが実に良く、成長して必要とされなくなっても覚えておかれることが実に良いのである。なぜなら大人になったとき、そうしたものの内の最もささやかなものでさえ、胸中で大いなる慈悲の心になるまでに高まって、その心のただ中に幼い子供たちを入らしめ、彼らの純真な手でこの世の石ころだらけの道にある庭を守らせるからである。その中ですべてのアダムの子供たちが、純朴で信頼にあふれ、世間知を身につけることもなく、ひなたぼっこする回数を多くすればするほど良いという、そんな庭である——こうしたものに彼女が何の関係があったというのか？ (197)

ルイーザは父親から「けっして不思議に思ってはならない。」(49)と命じられてきた。この言葉の中には「感情や愛情の育成に身を落とすことなく理性を養成する機械的技術と神秘の源」(49)が存在するとされる。感情や愛情によって論理を妨げてはならない、現実的な結論が得られないような思索に耽ってはならない、というのが父親の教訓なのである。そのため彼女の表情には「飢えて弱った想像力」(12)が表れている。彼女は楽しい夢を思い描くことができず、教育によって心のすさんだ弟トム(Tom)を楽しませてやれるような物語も知らない。そんな彼女の精神状態は次の言葉に表される。「疲れているのです、お父様。長いことずっと疲れっぱなしなのです…。」(13)そして彼女はただ暖炉の火を見つめることにのみ慰めを見出す。その行為を母親に咎められた彼女は、次のように言う。「炉火から赤い火花がこぼれ落ち、白くなり灰になっていくのを見ていること以外に、私は何にも心を励まされることがなかったのです、お母様。火を見ていると、結局、私の人生はなんて短いのだろう、人生で私がしたいと望めることはなんて少ないのだろう、と考えさせられたのです。」(54)彼女は、人生を短い時間と捉えて、空虚な生活をやり過ごそうとしているのである。彼女に自由な空想ができるのならば、暖かな火を見つめながら幸せな夢を思い描くことができるだろう。空想は時間が過ぎるのを忘れさせ、無限の時間を感じさせる。子供時代のそうした楽しい思いが成長とともに慈愛の心に発達し、その心は大人に子供が空想に耽ることを奨励させる。この意味において、空想は永続性を有していると言える。

グラッドグラインドにとって、特定の時間枠に収まりきらない空想は容認できるものではない。学校の児童たちの前に立つ彼は「砲口まで事実を装填され、一発で彼らを子供時代の領域から吹き飛ばす準備のできた一種の大砲」(3)のようだと表現される。着々と子供たちを時計の時間、すなわち功利主義社会の時間に従う大人に育て上げたい彼にとっては、

シシー・ジュープ (Sissy Jupe) がサーカス団で道化師役を務める父親に話して聞かせた『アラビア夜話 (*The Arabian Nights' Entertainments*)』の妖精や魔神などの空想物語は、「有害な馬鹿げたこと (destructive nonsense)」(48) である。こうした空想物語は、サーカスでの演技の不評を嘆くシシーの父親に苦悩を忘れる時間を提供するが、時間の進行を妨げるという点において、引用した語句の原語が示すように、グラッドグラインドの教育システムにとっては、破壊的な力を持つのである。そうした力を持つ空想が、親から子へと奨励されていけば、いつまでも彼のシステムは成果を上げることができない。したがって、彼としては永続性を持つ空想を根絶やしにしなければならない。空想の禁止と論理的思考の強制は、そのための手段なのであり、功利主義社会の時間の流れを維持することに貢献するものなのである。

次に工場経営者のバウンダビーについて考えてみたい。彼は、刻苦精励して裕福な実業家になったことを自慢し、「独力で成功した男」(14) であることをアピールする。次の引用は、そうした昔の自慢話の一部分である。

「私は靴の片方すら履いていなかった。靴下なんてものは、名前すら知らなかった。日中はドブの中で過ごし、夜は豚小屋で過ごしておった。そんなふうにして私は十回目の誕生日を過ごしたんだ。ドブは私にとって目新しいものではなかった、なぜなら私はドブで生まれたのだから。」(15)

彼の話によれば、彼は母親に捨てられ、祖母から虐待を受けて幼年時代を過ごした後、祖母の家から逃げ出して若き浮浪者となり、学校で教育を受ける機会も与えられず、世間の人々から小突き回されながら、使い走りから始めて現在の地位にまでたどり着いたことになっている。こう

した悲壮な身の上話は、彼の工場に勤める貧しい労働者たちの耳にも届いていく。しかし、注意しなければならないのは、彼が「彼の人生の事実」(16)として宣伝し人々に信じこませたこの身の上話が、物語の終盤で実は作り話だと判明する点である。彼が自分を悲惨な身の上話の主人公にする理由を、松村昌家氏は次のように述べている。「…バウンダビーは、想像しうる限りの最底辺から這い上がった経歴を想定することによって、コークタウンの労働者たちの貧困からくる不満と、毎日の単調な労働生活からの解放の要求をしりぞける戦術に、それを役立たせているのである。」(松村、184-5) 彼は、作り話という不正な手段を用いて、労働者たちを現状に縛りつけ、規則正しいリズムで生産活動を続けさせているのである。

こうした手段は、バウンダビーだけが利用しているのではない。コークタウンの実業家たちは皆、作り話を利用しているのである。

六ペンスを元手に六万ポンドを稼ぎだした〔コークタウンの〕どの企業家も、なぜ六万人近くいる働き手たちがそれぞれ六ペンスから六万ポンドを作り出さないのか不思議である、といつも公言しており、程度の差こそあれ、働き手たちの一人一人がそんなささやかな功績を成し遂げないことを非難しているのだ。私にできることなら、おまえにもできる。なぜそれをしに行かないのかね、と。(117)

上に引用した話に関しては、あらかじめ作品の中で作り話であると明示される。それゆえ、どの程度までこの話が信じられていたかは不明である。しかし、経営者たちが一様に作り話を利用して、労働者たちの不満を抑えこもうとしていることだけは事実である。

バウンダビーの場合、人々に作り話を完全に信じこませていたという点において、他の経営者たちよりも罪が深いかもしれない。彼は起こり

もしなかった出来事を事実に見せかけて、過去を捏造した。いくつもの過去の出来事が連なって現在に至るのが自然な時間の流れである。虚構の上に現在の時間を積み上げるのは時間に対する不正行為である。またグラッドグラインドにしても、ある意味で、時間に対して不正を働いていると言える。事実主義に基づく教育によって、彼は子供たちから子供時代を取り上げているからだ。子供たちは、無邪気な空想に耽り心を豊かにする時間を奪われ、一刻も早く大人になることを義務づけられてしまう。子供の成長にとって、そうした時間は欠くべからざるものである。

III 大いなる時間

時間は人為的に管理されうるものなのか。ディケンズは、その疑問を解くためのヒントを読者に与えてくれる。

コークタウンでは時間がその町の機械と同じように進み続けた。とても多くの材料が加工され、とても多くの燃料が消費され、とても多くの体力が消耗され、実に多くのお金が生み出された。しかし時間は、鉄や鋼や真鍮ほどには無慈悲でなく、あの煙と煉瓦の荒野に移りゆく季節を運び、その場所の恐ろしいまでの画一性に対してできる唯一の抵抗をした。(90)

時間は「偉大な製造業者」(90)とも呼ばれ、ルイーザやトムを大人へと成長させ、シーシーを美しい娘に作り上げていく。人間がこうした時間の作業を止めることは不可能だ。しかも時間の力は、グラッドグラインドが娘の成長に突然気づくことから示されるように、絶えず人知れず行使されている。単調なリズムで進む社会の時間の中であって、人間は、

それとは別な自然の時間の力を思い知らされる瞬間に、遭遇するのである。

バウンダビーの名声の失墜もそうした瞬間の一例として描かれているのではないだろうか。彼の真実の過去は、多くの見物人たちの前で、母親ペグラー夫人 (Mrs. Pegler) によって暴かれてしまう。息子を捨てたことをグランドグラインドに非難された母親は、自分の生活を切り詰めてまで、バウンダビーに教育を受けたり徒弟奉公をしたりする機会を与えてきたと訴える。彼女の息子に対する愛情と誇りは真実の歴史を持つ。この歴史は常に表に出たがってきたものと見るのが正しい。彼女は、禁止されていながらも、一年に一度、息子の姿を眺めるために遠くからコークタウンを訪れていた。彼女は、バウンダビーの工場で働くスティーヴン・ブラックプール (Stephen Blackpool) に、彼の主人を称える言葉を述べた。「その手にキスをしなければね…こんな立派な工場で十二年も働いてきた手に！」(80) 彼女は息子のことを誇りたくてたまらなかったのだ。またスティーヴンから子供のことを尋ねられると、彼女はあたかも息子が「死んだ！」(156) ということを示すように手を振るが、実際には「…私は〔息子〕を失ったのです。」(156) と答えたただけであった。彼女は、息子が死んでいると偽れなかった。彼女には、息子との歴史を捻じ曲げるような発言はできなかったのである。グランドグラインドに対する彼女の抗弁は、長く圧迫された思いの爆発によるもので、自然な時間の流れの中で起こるべくして起こった結果なのである。この暴露の瞬間、(刻苦精励して成功したことだけは事実として残るのだが) 過去を捏造したバウンダビーは真実の時間の中に引き戻され、「立派な人物、独力で成功した男、そして、海の代わりに泥の中から生まれたという点で、ヴィーナスよりも賞賛に値すべき商業上の驚異」(246) から「独力で成功したペテン師」(263) へと転落する。

グランドグラインドの思想の転換についても、自然の時間の力が関係

しているのだろうか。彼は後に事実主義に基づく教育の誤りに気づき、「信仰、希望、そして慈愛の心」(297)を大切にできるようになる。そのきっかけを彼に与えるのは娘のルイーザである。だから彼女の言動を軸にして考察してみよう。

まずは、グラッドグラインドがルイーザにバウンダビーとの結婚話を切り出した場面を見てみたい。その場面でグラッドグラインドは、大部分の結婚がかなり年齢の離れた男女の間で行われており、またその結婚においては多くの場合男の方が年上であるという統計上の数値を根拠にして、約二十歳のルイーザに、約五十歳の花婿を薦める。しかもグラッドグラインドは、結婚について考えるに当たり、娘に愛するという表現を使わないように求めるのである。娘は、父親の方針によって感情を押し殺すよう訓練を受けてきたが、心の奥底では人間の美しい感情を信じたいともがいてきた。結婚にイエスかノーかの選択を迫られた彼女は、そうした苦しい胸の内を父親に打ち明けるべきか思い迷う。しかしながら、事実主義に凝り固まった父親は、「彼女の内にある心定まらぬ一瞬」(99)を見抜けない。また父親は、彼女が彼の部屋の窓から見える工場の煙突を見ながら「あそこには生氣のない単調な煙以外に何もありません。でも夜になると、突然火が出てくるのです、お父様!…」(100)と言うときも、彼女の中に隠された感情があることに気づいてやれないのである。結局、結婚相手の経営する銀行に勤める弟トムの利益だけを考慮して、彼女は結婚を承諾する。その瞬間から、彼女は感情を示さぬようになり、それまでと同様に「意識がありながら死んだ状態」(216)で生き続けることになってしまうのである。

次に考えてみるべきは、一年余り後に、そうした精神状態にある彼女を父親のもとに走らせる動機は何か、という点である。駆け落ちを迫るジェイムズ・ハートハウス (James Hearthouse) から逃れ、彼女は父親の前に現れる。彼女は、彼の教育が、花が咲くはずだった彼女の胸を荒

地に変えてしまったことを訴えてから、次のように言う。

「お父様、束の間も癒されることのない飢えと渇きを感じながら、規則や、数字や、定義が、それほど絶対的ではないどこかの地へ向かいたいという激しい衝動を感じながら、私は自分の道を一インチ進むたびに戦いながら、大人に成長してきたのです。」(217)

彼女が「責めているのではありません、お父様。」(216)と言っている点を念頭に置けば、彼女が父親に伝えたかったのは彼女の真実の歴史である、と考えるとよい。これまで彼女の心の苦悩は、父親には隠されてきた。つまり、彼女の生きてきた本当の時間は、父親にとっては存在しないも同然であったのだ。彼女は、真実を告げることで、本当の自分の存在を確かなものにし、その上で父親に必要な助力をしてほしいのである。

娘が不幸な人生を送ってきたこと知り、グランドグランドは自分の教育の誤りに気づきはじめる。彼は、ルイーザを心ある人間として見つめ直していく。また、親心から彼は窃盗の罪を犯した息子を海外に逃がし、息子に罪を被せられたまま死んだスティーヴンの名誉の回復を図っていく。こうした一連の過程において、彼自身も人間性を取り戻していく。そうした彼の変化は老化現象によって示される。「彼は年老いて猫背になり、元気がなくなったように見えた。しかし彼は、この世で彼が事実以外に何も求めなかった時期よりも、もっと賢く、もっと善良な人間のように見えた。」(276) かつて事実主義を信奉していた頃の彼は、時間の経過にもかかわらず、「…人生の途上で立ち止まっているように見え、何の変化も受けていなかった。」(92) 彼は、ルイーザが生きてきた本当の時間を認め、過ちを犯した自分の過去をも誠実に受け入れる。「偉大な製造業者」(90)である時間は、そんな彼に、老いながら心を豊かにしていくという自然の流れの中に身を置くことを許したのである。

IV 結 び

時間は人間が支配してよいものではない。それがディケンズの信念なのではないだろうか。功利主義社会においては、時計が示す時間が人間を縛りつける。その結果、生活は単調を極めていく。また、問題を効率的に処理するため、人間の思考も論理的になりすぎる。ディケンズがそのような状況を好んでいないことは明らかである。社会の中にあっても、人間には、物語を読んで空想に耽ったり、誰かと心を通わせたりして、豊かな時間を過ごすことが必要である。そのことを忘れるならば、時間は未来のある瞬間に、人間に手痛いしっぺ返しをすることであろう。『ハード・タイムズ』から読み取れるそうしたメッセージは、当時の読者たちにだけでなく、現代において忙しい日々を過ごす我々にも投げかけられているようである。

引用文献

- Dickens, Charles. *Hard Times*. The Oxford Illustrated Dickens. 1955. London: Oxford UP, 1987.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol. 2. Everyman's Library. 1927. London: J. M. Dent & Sons LTD, 1980.
- Goldberg, Michael. *Carlyle and Dickens*. Athens: University of Georgia Press, 1972.
- 松村昌家. 『ディケンズの小説とその時代』. 東京: 研究社, 1989.